

A.

①

最上川

②

月布川

③

日本一公園

④

最上橋

## 第2回

# 舟唄の里 おおえ検定

Q.

大江町は昭和34年に左沢町と漆川村が合わさってできました。さて、大江町という名前は何が元になったのでしょうか？

“舟唄の里” おおえ検定を実施する会

大江町観光物産協会・大江町まちなか交流館指定管理者 一般社団法人ポート・  
大江町歴史研究会・大江町観光ボランティアガイドの会

## 目次

3	大江町の由来 漆川古戦場
4	楯山左沢城・日本一公園
5	江戸時代以降の左沢
6	左沢藩城下町大通り「御免町・内町・横町・原町」
7	巨海院と左沢城大手門 医王寺
8	称念寺 松山藩左沢代官所跡・旧左沢小学校防空壕
9	米沢藩左沢陣屋「米沢舟屋敷」 斎藤茂吉の来訪と歌碑
10	左沢舟着場(左沢河岸)・最上橋・最上川大江フットパス 左沢遊郭
11	JR左沢線・交流ステーション 舟唄温泉とテルメ柏陵
12	朝日連峰と古寺
13	古寺溪谷「神通峡」 中央公民館「ぶくらす」・歴史民俗資料館
14	百目木 波切不動尊「大瀧山不動尊」
15	大江の文化財
16	最上川大明神川原・おしん筏口ケ地 釣りキチ三平とヤマガタダイカイギウ
17	大江の農産物 青苧
18	大江の特産品 大江の地酒「大江錦」
19	最上川舟唄
20	おもしろい地名《百目木》《伏熊》《用》《富沢》
21	《小見》《荻野》《堂屋敷》《顔好》《十八才》《月布》
22	《貫見》《矢引沢》《切留》《道知畑》《古寺》
23	★追補 地名など ①最上川の由来 ②最上橋 ③最上川にかかる橋の数
24	④舟着場について ⑤源流 ⑥水害への対応 ⑦百目木の名称の由来
25	⑧舟運時代について・歴史等：大江町を造った代々の殿様
26	大江氏や酒井氏の子孫・楯山城と小漆川城・楯山城の発掘
27	大江町には城はいくつある？・町の歴史をもっと知りたい・祀られている神社
28	大江町にある寺院・寺社仏閣の配置・伝統の祭り/行事の数・大江町内の文化財の数
29	防空壕について・斎藤茂吉について
30	大江町での大きな災害・桃の実工房について・大江町への観光客数
31	大江町の用水路について

## ★大江町名の由来

大江町の町名の由来は、大江氏・最上川・そして楯山公園(日本一公園)にある。

中世からこの地を治めた大江氏に由来すると考えがちだが、それを主とせず、最上川には多くの川と多くの沢が入り、まさに"百川衆沢尽く一大江に帰す"の意味のとおり左沢付近から大河の様相を備えることからそのさまを取ったとある。

さらに、中国明の高啓が詠んだ「金陵雨花台に上りて大江を望む」の漢詩を添え、南京にある"金陵雨花台"から揚子江を眺めたさまが、規模こそ比較にならないものの、楯山公園(日本一公園)から最上川を眺めたさまと似ているとした。

最上川が多くの支川等の水を集め左沢付近から大河の様相を呈することに例え、悠久の町の繁栄を祈念し「大江(たいこう)」の意味を取り「大江"おおえ"」と名付けた。

時の山形県知事 安孫子藤吉氏の命名である。

## ★漆川古戦場

時は南北朝時代(1338～1392)南朝方の大江氏を北朝に降すために、1356年に足利幕府は安察使として斯波兼頼(最上氏の祖)を山形に入部させた。以後、両者の睨み合いが始まり、斯波氏入部の3年後に最初の戦い(現在の中山町あたりと言われるが場所不明)があり、大江氏頭領の元政が戦死している。この地域での南北朝の戦いはそれから8年後の1367年に、現在の梨木原から小漆川一帯の下本郷地域を舞台に戦いが繰り広げられた。いわゆる「漆川の戦い」である。斯波軍の情報作戦によって寒河江・左沢・溝延・白岩などからおびき出された大江軍は、斯波軍に挟み撃ちになった形で現在の荻野の長泉寺付近の荻袋楯において一族60数名が自害したとある。これに両家の兵を含めれば、膨大な数であったものと推察される。昭和の始めに長泉寺の境内からおびただしい数の人骨が発見され、これが漆川の戦いで果てた大江一族の遺骨でないと推察されている。

この漆川の戦いが大江氏は南朝から北朝に鞍替えするきっかけとなり、以後、大江・斯波氏との南北朝の戦いはない。

それから約100年、これと言った戦いがなく平穏な時期を過ぎ、戦国の世を迎えることになり、今度は大江・最上・伊達の豪族による三つ巴の戦いの火ぶたが切られ、1584/天正12年の大江氏滅亡まで続いた。

諏訪原には山形県が昭和7年に建立した"漆川古戦場の碑"がある。また、長泉寺には1936/昭和11年に本郷村が建立した漆川戦供養塔がある。

## ★楯山左沢城・日本一公園

### 「大江氏と楯山左沢城」

鎌倉幕府の要職(政所別当)にあった大江広元が1189年に寒河江<sup>さがえのしょう</sup>荘の地頭となり、その後、長男親広<sup>ちかひろ</sup>に譲られ、以後大江氏の所領地として最上氏によって滅亡されるまでの約400年間、当地を治めた。

長男親広が朝廷と幕府が戦った承久の乱(1221)で朝廷に味方したため幕府の怒りを買ひ、寒河江荘に逃れ来て大江町富沢や西川町中軸、吉川などに隠れ住み、幕府の怒りが解けても寒河江荘を離れる事なくこの地で亡くなる。

大江氏一族は、鎌倉幕府内に起きた権力闘争の霜月騒動<sup>しもつき</sup>(1285)以後、散り散りになり子孫の元頭<sup>もとたか</sup>らは自領地の寒河江荘に逃れる。以後、寒河江を本城とし寒河江荘の各地に城を築き領地を守った。楯山左沢城は時茂<sup>ときしげ</sup>の子の元時<sup>もととき</sup>が南北朝(天皇が二人存在した)時代(1338～1392)の1346年頃に数年をかけて築く。

当初大江氏は南朝方であったが、北朝方の山形の斯波兼頼<sup>しば</sup>と戦った漆川の戦いに敗れた。以後北朝方となり所領安堵される。

大江氏18代高基<sup>たかもと</sup>の代に斯波氏末裔の山形城主最上義光に敗れ、寒河江荘の全域が最上氏の所領となる。

楯山左沢城は最上氏の時代も使用し、拡張・整備が行われて来たという。最上氏が改易(1622)になるまでの276年間に渡って使われたといわれる。無数の曲輪<sup>くるわ</sup>が峯<sup>みね</sup>や谷に造られており全国有数の規模であるといわれ、2009/平成21年2月に国の史跡指定を受けた。

この史跡指定を受け、国の補助によってさらに整備を加え、楯山左沢城の威容に触れられるよう樹木の整理、遊歩道の整備、展望台の設置、説明案内、案内標識などの充実に努めている。

### 「日本一公園」

日本一公園の愛称は、1932/昭和7年頃、この地方は冷害が続き、そのため救農対策として楯山を越える道路事業が行われた。この工事に携わった人達が食事や休憩のときにこの場所に行き、ここからの眺望が素晴らしいことに驚き「ここは日本一の眺めだ」と言ったことから、いつの間にか「日本一さ行くべ」と言うようになり、いつとはなしに「日本一」との愛称で呼ぶようになったという。

公式の名称は「楯山公園」である。この絶景は最上川229kmの中でも特別の眺望で、画家や写真家をはじめ県内外から多くの方々が訪れる。

1962/昭和37年、最上川舟唄<sup>ふなうた</sup>発祥の地であることから、この景勝の地を選び「最上川舟唄碑」を建立した。時の山形県知事安孫子藤吉氏の揮毫<sup>きごう</sup>による碑の除幕式には、知事、県議会議長をはじめとする各界の著名人の参列をいただき盛大に挙行された。

平成9年/1997年には「最上川ビューポイント」に選定される。

2002/平成14年には読売新聞主催「日本遊歩百選」に"最上川舟唄のふるさと"として選定される。

2013/平成25年には、重要文化的景観「最上川の流通・往来及び左沢町場の景観」として、最上川、左沢町場、楯山を包含した地域を山形県で初めて国の選定を受ける。

## ★江戸時代以降の左沢

江戸初期の1622/元和8年に山形藩主57万石の最上氏は、御家騒動であえなく改易<sup>かいえき</sup>となり最上家の領地は幕府に接收<sup>せつしゅう</sup>された。直ちに最上氏所領分が分割され新たな藩が誕生した。庄内藩<sup>さかいただかつ</sup>に酒井忠勝、新庄藩に戸沢氏、山形藩には鳥居氏、上山藩には松平氏など、上杉、伊達氏を意識した徳川幕府の譜代の大名が移封<sup>いほう</sup>された。

同じく左沢藩が成立したことに伴い、藩主として庄内藩主 酒井忠勝の弟の直次<sup>なおつぐ</sup>が入った。楯山の山城<sup>やまじろ</sup>時代における城下町は元屋敷付近であったが、平山城の小漆川<sup>ひらやまじろ こうるしがわ</sup>に新たに城を築き、東側の最上川と南側の月布川<sup>つきぬの</sup>に囲まれた一画に町割りがなされ、左沢藩の城下町が形成された。

酒井氏の家系はすばらしい。直次の祖父忠次<sup>ただつぐ</sup>は徳川四天王の一人で徳川家康とは"いところ"同士である。酒井家は譜代大名中の譜代と云われた家柄である。

直次は左沢藩主に就いて10年で亡くなってしまい、跡継ぎが居なかったため左沢領は幕府領となり左沢藩は消滅した。

同じ頃、熊本の加藤清正<sup>かとうきよまさ</sup>氏の没後、忠広の代に改易となり庄内酒井氏に預けられ、左沢1万石を与えられた。預かった酒井氏は左沢では目が届かないとして櫛引<sup>くしびき</sup>（現在の鶴岡市）に自領地を与え住まわせた。代わりに左沢領は庄内酒井氏領となり、1647年の松山藩2万石の成立に伴い左沢領1万2千石は松山藩領となり以後明治まで続いた。初代松山藩主酒井忠恒<sup>ただつね</sup>は直次の"おい"である。1869/明治2年、松山藩<sup>まつみやま</sup>は松嶺藩と改められた。

今は城址の面影が無くなったが、巨海院<sup>こかいいん</sup>に左沢城大手門<sup>おおもてもん</sup>と云われる山門<sup>さんもん</sup>が残っている。

左沢城址は新道(1902/明治35年開通)の開設によって分断され城の形が失われてしまったが、明治初期の民有地として解放するまでは本丸と二の丸の形は残されていた。

藩制時代の城下町が現在の街の姿の原型となっている。

左沢城があったことから、地域の人々は参勤交代の行列を想像し"奴踊り<sup>やつこ</sup>"を昭和の始めに天皇即位を記念して作り上げ、1928/昭和3年に御大典<sup>ごたいてん</sup>の祝賀行事で初披露を行った。

参考にしたのが村山市湯野沢の奴行列や久保田藩佐竹氏の振奴<sup>ふりやつこ</sup>、それに、尾花沢の舞奴<sup>まいやつこ</sup>などを取り入れ完成させた。中心になったのが最上川舟唄を編み出した後藤岩太郎氏といわれる。その後しばらく中止していたが、1952/昭和27年になり、天童藩織田家の家臣が持っていたのぼり旗<sup>はさみばこ</sup>、鉄箱、長槍などの奴道具を譲り受け、改めてこれを復活させ「十三区奴」として継承し、河北町が開催する「全国奴まつり」などに出場し、奴おどりの技術向上に努めている。大江町の秋祭りの定番の出し物として貴重な存在となっている。

## ★左沢藩城下町大通り「御免町・内町・横町・原町」

江戸初期の1622/元和8年に左沢藩が成立し町割りが実施され、左沢城下町のメインとなったのが御免町、内町、横町、そして原町通りである。

1631年に左沢藩がなくなり、1647年に松山藩の成立により、東町（現在のふれあい会館付近）に左沢代官所が出来ると南東部に町が広がった。

江戸、明治、昭和とそれぞれの時代に大火に見舞われ、1936/昭和11年の大火後に区画整理が行われ、新しい道が出来ると町の形が変わっているものの基本の形は変わっていない。

通称ウナギの寝床と云われる町家づくりで、細長い屋敷が短冊状に並んでいる。間口で税を課していたことや、町に多くの商家や職人を住まわせるための知恵と云われる。

城から一番近い御免町は長井・六十里越を結ぶ街道であり、いち速く職人や商売人を住まわせ、賑わいを創り出すために一時期税金や労役を免除した名残でこの名が付いた。

城下町だけに、天神前や小漆川にはカギ型や丁字路の道型が今も残り、城に敵が容易に攻められない配慮がなされている。また、密集地のため火災が多く商売道具などの安全のために蔵が多く、蔵座敷は内町横町通りだけで9棟を数える。

江戸初期から六斎市として城下町には4と9の付く日に市が立ち賑わい、今も市神が残っている。また、御日市と称して代官所公営の馬市が立った。8月25日から約1週間は各地から多くの馬喰が集まり馬の売買がなされた。多くの掛け茶屋が軒を並べ、酒肴、うどん、そば、果物などを販売し、昼は芝居、夜は興業物などで賑わった。通り中央には堰がありその上にヨシズ張りの茶屋遊女屋・賭博場が出来た。この期間中は博打が黙認されたので各地から博徒が集まり賭場を開帳した。また、遠く山形や谷地からも遊興人が集まり、遊女屋まで繰り込んできて1週間で多大の利益を上げて行ったという。市の最後の日には寒河江との間は人や荷物で長蛇の列となり、百目木茶屋などは大繁盛であった。

今は人通りが少なくなり寂しい限りですが、改めて賑わいを創り出すために、この通りを「くるま中心」から「ひと中心」の通りにして、買い物や祭りを楽しめるようにするため、内町横町通りの改修工事(くらしの道整備事業)を2008/平成20年から開始し平成22年夏に完成した。併せて景観の良い街並みを歩いて楽しむようにと、通りの若者が中心となってプロジェクトチームをつくり、ブロック塀を板塀にしたり、ベンチや草木の植木を配置したり、縁日や盆踊りなどのまつりを行ったり、賑わい実現に活動して来た。

通りにある旧きらやか銀行大江支店の建物が2013/平成25年に大江町に寄贈された。翌年には重要文化的景観の重要な構成要素の建物になる。2018/平成30年、交流施設やカフェを含む拠点として、まちなか交流館「ATERA」がオープンした。

近年、家屋の老朽化や道路の整備によって、舟運時代の風情が少しずつ失われており、これ以上失うことのない「左沢舟着場らしい景観の町並みを維持・保存する」という思いを強く意識してきた。さらに、2013/平成25年に国指定の重要文化的景観の地となってからは計画的な維持保存に税金投入出来るようになり保存整備が進展している。

原町通りには各種の店が軒を並べ、造り酒屋も会津家、金山家、五十嵐家の3軒があった。さらに、左沢郵便局、左沢自治体警察署、東町には左沢小学校などの公共施設があった。十字路には、斎藤茂吉の「われいまだ十四歳にて庄内に旅せし時一夜やどりき」の歌碑がある。

会津屋清野家建物は左沢の名棟梁田宮源蔵の作と云われ、称念寺旧寺院、左沢クラブもその一つである。他に現存するのは小見伊藤登啓氏宅、大屋家屋敷神の「穴守稻荷」である。

## ★<sup>こかいじん</sup>巨海院(曹洞宗)と左沢城大手門

巨海院は、楯山の山城時代にはその守りとして楯山にあった。大江氏が楯山に築城する際に寒河江から移したと伝わる。江戸時代の左沢藩の成立(1622/元和8)とともに小漆川城の築城と城下町の町割りに伴い、藩の菩提寺としてこの地に移された。

さらに称念寺、実相院、八幡神社なども同時に移され、城下町の守りとして鬼門である北東の方角に配置された。

山門は藩制時代の左沢城の大手門であると云われる。<sup>しゃちほこ</sup>鯨があるなど寺院の山門にはない造りであり城門にほぼ間違いがないと評価し大江町文化財に指定されている。

巨海院には左沢藩主の酒井直次と奥方の墓がある。高野山(和歌山県)にも直次と奥方の墓がある。

### 「左沢城大手門」

左沢藩は1622/元和8年に成立し、すぐに築城を始めたと考えれば、この城門は1622年頃からわずかな年数で完成していたわけで約400年前の城門である。庄内松山藩松山城の築城は1781年で大手門は1782年の建造とあるが、現存する城門は火災に遭い1792年に本間家の寄進により改築しているので令和元年で227年前の城門ということになり、巨海院の山門は松山本城よりも165年も古い大手門である。

本堂及び山門に上がっているカタバミ紋は酒井家の家紋である。

この左沢城大手門は大江町指定文化財であるが、松山本城の大手門は山形県指定文化財となっている。

## ★<sup>いおうじ</sup>医王寺(天台宗)

大江町には天台宗寺院は少ない。医王寺は大江町内の代表寺院である。当初は内町にあったと云われる。現在地にある薬師堂の別当寺院であったことから、何らかの理由で現在地に移転した。大江幼稚園が併設している。

立派な石庭がある。全国のいろいろの石が並んでおり国歌にある貴重な"さざれ石"がある。

驚くのはこの"医王寺石庭"と刻まれた碑である。この文字を<sup>きごう</sup>揮毫したのがかの有名な「岡本太郎」である。なぜなのか?興味が尽きない。

境内には、月布川で発掘した男性のシンボルに似た石が"日本一の道祖神"としてドンと鎮座している。一見の価値あります。

高いところに鎮座しているのは金蛇を首に巻いたブロンズの大きな<sup>べざいてん</sup>弁財天です。御利益あらたかで遠くからご参拝にお出でになる方も多らしい。

弁財天は水の神様、学芸の神様とも言われ、最上川舟運時代は航行安全の祈願所であったと伝わる。

ここの地名は薬師堂で古くから薬師様が奉られていた。北側の地名は弁財天で厳島神社が祭られており、ここも舟運との関わりがあったものと思われる。まさに、大江のパワースポットである。

## ★<sup>しょうねん じ</sup>称念寺(浄土宗)

称念寺は大江氏時代からの寺院である。元楯山から左沢藩城下の守りとして巨海院、実相院と共に現在地に移された。現寺院の前の建物は田宮源蔵棟梁の作で荘厳な造りであったと云われるが、火災により失われた。

境内には"芭蕉<sup>ばしやう</sup>の墓"と刻まれた碑があり、「五月雨を集めて涼し最上川」の句も添えてある。芭蕉没後80年に左沢連と称するグループが建立した。

さらに、斎藤茂吉が前住職の山口さんに宛てた「オオキミノタメミクニノタメニサゲタルキミノイノチハトワニカガヤクサイトウモキチ」の文字が刻まれた碑がある。

これは、茂吉の東京青山病院に書生として山口さんのご子息が行っていたが、軍に招集され戦死されたのを悼み電文として茂吉がしたためたのを住職が碑にして建立した。

また、特異な碑もある。柴田小文治勝之の墓なるものである。左沢の博徒の親分で子分200人程を持ち、舟による運送を業としていたらしい。幕末には戊辰戦争で庄内藩に味方し、侍として活躍したと伝えられる。

## ★松山藩左沢代官所跡・旧左沢小学校防空壕

### 「松山藩左沢代官所跡」

東町は、庄内松山藩の成立(1648)によって代官所が置かれたことにより造られた町である。代官所家中衆の屋敷も造られた。敷地東端にある伏見稻荷神社は松山初代藩主忠恒公が勧請したといわれる。また、現八幡神社敷地は代官所の米蔵であった。北側の御免町<sup>だいかんこうじ</sup>に至る道路は今も代官小路と呼んでいる。

明治になり、廃藩置県によって山形県となり、1873/明治6年には西村山地方で初めての第一番学校がこの地に建てられ第一番左沢学校とされた。同じころ戸長役場<sup>こうちやうやくば</sup>もおかれた。

第一番左沢学校は、左沢尋常高等小学校、終戦後に左沢小学校と名称が変わり、1986/昭和61年に現在地に移転した。1991/平成3年、その跡地に"最上川の歴史と文化"がテーマの文化ホールとして「町民ふれあい会館」がオープンした。

現在の左沢小学校北側にある流泉寺(浄土真宗)はこの地に有ったが、1936/昭和11年の大火後に移転した。

### 「旧左沢小学校防空壕」

町民ふれあい公園の地下には現在も旧左沢小学校防空壕がある。1944/昭和19年に太平洋戦争が激化し、空襲から学童を守るため1200人の学童全員が入れる防空壕が計画され、町や子供の家族、<sup>あたん</sup>亜炭採掘業者と共に昼夜突貫工事で実行された。まず約600人分が短期間で完成を見た。学童専用の防空壕としては県内でも最も大きい規模と云われた。

しかし、昭和20年に入ると東京地方はアメリカ軍の空襲が激しくなり、陸軍軍医学校が山形県に疎開することになり、それに伴い関連する機関、施設なども同時に疎開し、左沢尋常高等小学校や本郷東部尋常高等小学校などもその施設となった。左沢尋常高等小学校には軍医学校の印刷工場が置かれ、防空壕もその施設とされてしまった。

未来を担う子供たちを守るために造った防空壕は軍の施設に代わってしまった。このため、左沢町は以後残りの子供たちの為の防空壕を掘ることはなかった。



## ★米沢藩左沢陣屋「米沢舟屋敷」

桜町(通称：川端)は左沢舟着場であり、ここに米沢藩左沢陣屋が置かれていた。

江戸元禄の頃(1692頃)に五百川峡谷の開削が進み、米沢との往来が出来るようになると同時に設置された。もともとは米沢藩の御用商人だった西村久左衛門が、高畠は屋代地域の幕領年貢米の運搬を請け負い、五百川峡谷に舟道を開削することを思い立ち自費で難所の工事を行い、左沢に舟屋敷を開設したのが始まりと言われる。東西20間、南北40間の広さで柴垣が巡らされ、陣屋1棟、米蔵や塩蔵4棟米掛け小屋などがあつた。残っていた塩蔵と称される土蔵1棟が惜しまれながら1956/昭和31年に取り壊された。敷地は海野権四郎所有であつた。

1710/宝永7年、米沢藩は水上輸送を西村久左衛門の請負から米沢藩営に切り替えを行った。左沢陣屋には米沢藩の役人が派遣され、海野権四郎が陣屋守に任命されて蔵米、蔵芋麻の出し入れ、舟の管理、破舟の処理などを行っていた。

左沢船着場は、上流部の小鵜飼舟(30～50俵積)から下流部の鰯舟(250～350俵積)に積み替えをする重要な川港であつた。小鵜飼舟が酒田まで自由航行できるようになる1872/明治5年まで航行の安全のため厳しく規制された。

## ★斎藤茂吉の来訪と歌碑

斎藤茂吉は左沢に4度ほど訪れている。左沢にアララギ派の門人の福田政直氏が居たこともあり訪れたのであろう。その時々には歌を詠みそれが今に残されている。中でも福田氏に最後に訪れたときに揮毫した歌が元屋敷に建立された。

大江町には茂吉の歌碑が5基あり、自筆の揮毫したものがあればそれを刻んでも良いが、無ければ明朝体で刻んでくださいと指導されており、左沢には福田宅で揮毫された「南より音たてて来し疾きあめ大門外の砂を流せり」があり、郭のあつた場所に建立された。歌集によるとこの歌は和歌山県は高野山で歌つたとあり、なぜ左沢に来て高野山の歌を揮毫したのかははなはだ疑問が残る話である。福田宅に訪れたときに「俺を郭に連れて行け。」と言ひ、「でも止めておくか。」と云つたとのおもしろい逸話が残っており、あるいは左沢の郭に何かの思いを残したか、はたまた残したかったのかもしれない。

称念寺には、先代住職の山口さんの御子息が青山病院で茂吉の書生となっていた時に軍に招集され戦死したことを悼み、茂吉が送った電報「オホキミノタメ ミクニノタメニササゲタル キミノイノチハ トハニカガヤク (大君のため 御国のために捧げたる 君の命は 永遠に輝く)」をしたためた碑がある。

左沢で作った和歌は前記のものの他次の4首がある。

- ◇ われいまだ十四歳にて庄内に旅せし時一夜やどりき (原町)
- ◇ 左沢の百目木たぎちて最上川ながるるさまも今日見つるかも (最上川河畔)
- ◇ さ夜なかとなりたるこゝろに目をあきて最上川の波の音をこそ聞け (最上川河畔)
- ◇ 最上川のさかまくみずを今日は見て心の充つるさ夜ふけにけり (最上川河畔)

## ★左沢舟着場(左沢河岸)・最上橋・最上川大江フットパス

### 「左沢舟着場(左沢河岸)」

川港の左沢舟着場(河岸)は百目木から月布川合流点あたりまであったと云われ、さらに藤田の塩の瀬には幕府領の小見地区などからの蔵米を積み出す舟着き場がありその下流には薪炭材や木材を運搬する舟着き場があった。

現在のふれあい会館は松山藩の左沢代官所であり、月布川が合流する区域が藩の舟着き場となっていた。藩の米蔵は現在の八幡神社の場所にあり1878/明治11年に神社地となるころまであった。

今は河岸の面影は無くなったが、最上川へ至る道が数カ所残っており今に伝える証となっている。

### 「最上橋」 (旧最上橋と最上橋)

最上橋の命名の由来は不明であるが、最上川に架かる橋は80橋以上で最上の名前が付くのは3橋である。庄内には「最上川橋」があるが、最上橋はここにある2橋だけである。新旧共に最上(さいじょう)の川に架かる最上(さいじょう)の橋ということになる。

旧最上橋は、昭和15年に公共事業で現在のコンクリート橋に架け替えられた四代目の橋である。橋長97.6mの3連アーチ橋でバルコニーが4カ所設けられているなど余裕のある設計がなされている。平成15年県内最初に土木学会推奨Aクラスの「土木遺産」に指定された。

その前は木橋で1883/明治16年に最上川本川2番目に架橋した。木橋は私費を出し合って架橋されたので渡り賃を取っていた時があった。木橋は朽ち易いのと増水のため何度も架け替えが繰り返された。

木橋の前は桜町の舟渡しがあった。江戸時代の最上川は国境であり、敵国になるかも知れない国境には橋はあり得なかった。

新しい最上橋は2003/平成15年に完成。橋長129.5m幅員16.5mである。

### 「最上川大江フットパス」

最上川フットパスは、大江町地区では大明神のおしんいかだ筏口ケ地から百目木までの約3km区間の遊歩道を指している。国土交通省が地域の自治体などと協調して整備し維持しているもので2006/平成18年にオープンした。

最上川のフットパスの中でも、ここ大江フットパスは街場に近く、最上川を身近に感じながら散策することが出来る優良なフットパスであり、日常的に散策する人が多い。

ふれあい会館から藤田大明神までは、断崖が多く最上川沿いを歩けないのが難点である

## ★左沢遊郭

川港の左沢のにぎわいは自然発生のごとくに郭くるわができあがる条件にあった。郭は左沢の町内に点在していたようですが、1906/明治39年には3回にわたる大火で合計で204戸が焼失したといわれ、その時に楯山のふもとの元屋敷の一面に集められた。集められたのは5軒(万年屋、大和屋、柏木楼、山形庵、国風亭)で軒を並べていた。

左沢の郭が繁盛したのは舟運の川港であることに加え六ろくさいし斎市や馬市などが立ったこと、さらに1874/明治7年頃から1919/大正8年まで巨海院が西村山郡の徴兵検査場として46年間も続いたことが挙げられる。「左沢音頭」にある「♪かすみたなびく山下あたり 恋のぼんぼり 恋のぼんぼり あだなさけ 仇情…」の歌詞になったゆえんである。

## ★JR左沢線・交流ステーション

### 「JR左沢線・左沢駅、交流ステーション」

JR左沢線(山形駅～左沢駅)26.2kmは1922/大正11年に開業した。白鷹町荒砥<sup>しらたか あらと</sup>まで延長する計画となっていたが、戦局の激化により中止された。このため、幸か不幸か左沢駅は"ロマン漂う終着駅"そして"旅立ちの始発駅"となった。左沢線は、北山形駅と左沢駅間が正式の区間と定められており距離は24.3kmである。

大江町の玄関口の一つとして、2002/平成14年に開業80年を記念して駅舎の改築と併せ交流施設の新設及び周辺の道路広場環境の整備を数年の事業で行った。交流ステーションと名付け、大江町の祭り文化のシンボルとして、囃子屋台2台と獅子舞、奴を常設展示し2003/平成15年にオープンした。

交流ステーションの建物は、山城である楯山左沢城の見張り櫓<sup>やぐら</sup>をイメージして造られており、同年に山形経済同友会賞を受賞している。

### 「駅周辺整備・SLイベント」

駅前景観整備のため5差路までの駅前道路及び駅前広場整備が2007/平成19年度に完成した。完成祝賀会で、左沢に継承されている"女相撲"が披露された。

2003/平成15年からほぼ毎年左沢線にSLを運行していた。このSL"C11型325号"は、1972/昭和47年まで左沢線を走っていた蒸気機関車で、現在は栃木県真岡鉄道<sup>もおか</sup>の所有となっている。このSL運行は2015/平成27年以降実施されていない。C11325の機関車は運行するための点検に莫大な費用がかかることから維持運用をあきらめたと報道された。

## ★舟唄温泉とテルメ柏陵<sup>はくりょう</sup>

舟唄温泉は1991/平成3年8月野球場のピッチャーマウンドの地下730mに達したところで湯脈にあたり、自噴量毎分300ℓ 温度49℃のすばらしい温泉を得た。安定した湯量を確保するためにポンプ揚湯した結果毎分670ℓ 温泉53℃と入湯するには最適の温泉であり、舟唄温泉と命名した。泉質は高濃度温泉で溶存成分は約2万mgで1ℓに約2gと県内でも有数のすばらしい良質の温泉である。

その後15年を経た2006/平成18年に高濃度温泉のためパイプの腐食と成分の付着などにより、当初のような温泉量を得ることが出来なくなったことから、新たに近くに再ボーリングを行い地下700mからほぼ同じ成分、温度を有する二代目の温泉を確保することができた。

温泉の利用は最初柏陵荘に引湯し公衆浴場としていたが、1995/平成7年に現在の温泉館がオープン。柏陵荘を含めた温泉地域をテルメ柏陵と命名した。テルメとはドイツ語で温泉の意味である。最初に舟唄温泉を掘削したときに北海道大学医学部登別分院の阿岸教授の指導を受け、温泉活用を学ぶ為にドイツに町職員を派遣、そのおりに指導を受けたことがきっかけとなった。

より多くの町民の方々や町外の人々に楽しんでもらっており、年間約50万人の利用がある。日帰り温泉としては県内有数の利用客を誇っている。

この舟唄温泉のおもしろい特長がある。毎日湯の色が変わることである。なぜ変化するのかその原因は分っていない。このため、湯殿の入り口には毎日「今日の温泉の色は〇〇」と表示し、常連客などの利用者に毎日の変化を楽しんでいただいている。

近くには観光ヤナがあり、落ちアユを主に営業している。1992/平成4年例の一億円事業で町が建設し、運営はふるさと観光(株)が行っている。

## ★朝日連峰と古寺<sup>こでら</sup>

朝日連峰は、磐梯朝日国立公園の「朝日月山地域」に属し、主峰大朝日岳は1870m、大江町の最西端の小朝日岳は1647mであり、山形～新潟にかけ日本海に添い屏風のようにそびえる。小朝日岳を源流とし大江町を縦貫する月布川はいたるところ蛇行して流れている。

山岳は原始古代時代から自然崇拝の対象として存在し、「山には神が宿り人間はみだりに近づいてはならない神聖な場所」とされ、先祖の霊が住まれ、また、農耕神の宿るところとされている。山岳宗教が盛んな奈良時代以前から平安、鎌倉時代にかけて朝日連峰は「朝日大権現」を祀り、修験の山として出羽三山信仰と並ぶ賑わいをみせていた。

### 「古寺地名の由来」

朝日岳修験が隆盛のころ古寺には「南光院」という寺院があり、朝日大権現を支えていたといわれる。鎌倉幕府執権の北条時頼の時、朝日大権現の宗徒と幕府の争いにより千年封じにあったとの口伝が残る。朝日町大沼の代行院には朝日岳修験の歴史が伝わる。

時代がうつり「千眼寺」建立の頃は、出羽三山信仰が隆盛を極めたころで、置賜、会津、関東、新潟方面などからひきもきらず参拝の行者の列があったといわれ「湯殿まで笠の波打つ大井沢」の句がある。このころの古寺の千眼寺は、宿坊を兼ねたような寺であったろうと推察される。古寺の地名は、朝日大権現時代の南光院があったことを指しているものと思われる。現在も朝日岳修験や出羽三山詣での古道を断片的に見ることができる。

### 「朝日軍道」

戦国時代、会津上杉景勝の家臣直江兼継が上杉氏の所領地であった庄内地域と直接結ぶ道路を造るため、朝日連峰を越える間道を開設した。いわゆる「朝日軍道」といわれる。今も以東岳や西朝日などに稲妻型の道跡を見ることができる。

### 「古寺軌道」

1934/昭和9年には、当時の営林署が国有林のブナの伐採を開始し、古寺周辺のブナ材を運搬するために柳川<sup>やながわ</sup>まで森林軌道が敷かれた。古寺には事業所が置かれ、古寺の戸数は40戸を越え、従業員子弟のため1935/昭和10年に七軒東<sup>しちけん</sup>小学校の古寺分校が開設され、1963/昭和38年に古寺小水力発電が開始された。1966/昭和41年には古寺分校は近代的な校舎へと改築され、電話も開通した。1968/昭和43年には長らく古寺の最僻地で教育に携わって来た功績と共に、記録本「雪の灯台」を著した渡部市美先生、洋子夫妻が吉川英治賞を受賞された。

1970/昭和45年、古寺への地蔵峠林道が開設と同時に古寺森林軌道が廃止された。現在、古寺森林軌道跡の一部は、古寺峡谷「神通峡遊歩道」となっており、来訪者の人気が高い。

### 「大江町朝日連峰古寺案内センター」

古寺は朝日連峰への表登山口の一つであり「古寺鉱泉口」と称する。主峰大朝日岳への最短コースであり登山客が多い。登山客に長らく愛されて来た古寺鉱泉「朝陽館」は老朽著しく今日の宿泊施設としてふさわしいとは言えず、2018/平成30年から新たな登山愛好者の要請に応えるべく、駐車場を約200台規模に拡張、朝日連峰地域の案内センターの役目を持つ宿泊施設の整備を大江町の事業として行い、2020/令和2年にオープンした。

## ★古寺溪谷「神通峡」

古寺溪谷「神通峡」は、朝日連峰小朝日岳、鳥原山、古寺山などに囲まれた約3千ヘクタールの区域の雪解け水や雨水を流し、数百万年の星霜<sup>せいそう</sup>をへて削られた溪谷である。

地球規模で考えると日本列島が大陸から引き離され、いったん海に没し、再び隆起をはじめると月布川の流れが出来、そこから川の流れによって削られ始め、隆起の早さよりも流れで削られる早さの方が早いために古寺溪谷が出来たものといわれている。1954/昭和29年に古寺溪谷を歩いた時の安孫子藤吉知事は溪谷の見事さに驚き、<sup>かんのんぎょうふもんぼん</sup>観音経普門品から引用しこの溪谷に接すると神通力を得るとして「神通峡」と名付けた。

古寺溪谷を通して通行出来るようになるのは、1934/昭和9年に古寺周辺のブナ材を柳川まで運搬する森林軌道が開設されてからである。それまでは、不動滝付近に田の沢集落があり、そこまでの道があったと云われる。

1970/昭和45年、ブナの伐採が終了し森林軌道が廃止されたことで古寺溪谷は荒れ放題となってしまった。1979/昭和54年、この古寺溪谷「神通峡」を再び蘇えらせようと林業の国庫補助を受け整備に着手、以後5年の歳月を経て、1984/昭和59年に4.2kmの「神通峡遊歩道」が完成。県知事が「神通峡」と命名された古寺峡谷の荘厳な美しい姿に、再び接することが出来るように面目を一新した。

溪谷は自然災害に遇いやすいためその管理が容易でない。2017/平成29年、雪崩による橋の崩壊等がようやく終了しオープンしたばかりの溪谷に、2018/平成30年春に大規模な地滑りが発生。国有林野の崩落であることから森林管理署の手によって復旧工事を実施。令和7年に開通した。

## ★中央公民館「ぷくらす」・歴史民俗資料館

中央公民館は、一代目は1972/昭和47年にスポーツや集会行事など多目的に利用できる大ホールを有する施設としてオープンした。現在の中央公民館は二代目で2016/平成28年に大江町産の西山杉をふんだんに使用し「ぷくらす」と名付けられた。ヤマガタダイカイギウの愛称の「ぷくちゃん」と「学びや、教室、クラス、暮らし」を併せた造語である。

改築前までヤマガタダイカイギウが展示されていた。ヤマガタダイカイギウは1978/昭和53年8月、最上川にかかる用橋<sup>よう</sup>上流の川床で小学生2人によって化石が発見され、これが世界的発見となった。その化石及び実物大のレプリカが展示された。本物の化石は山形県立博物館に保存・展示している。

現在レプリカはふれあい会館に展示している。

歴史民俗資料館は、朝日連峰山麓の十郎畑にあった名主の家で、古くから<sup>あおそ</sup>青芋や漆、蚕などの産物を売りさばく商業を手広くしていた旧家斎藤家の建物である。母屋は1822年の建物であり土蔵は1800年ころの建物である。十郎畑の屋敷は石垣を回した堂々とした風格の家である。特徴は、せがい造りくらかけぐし、袴腰(半切妻)、田字形間取り、引込み玄関などと言われている。当時の山の恵みがいかに大きく豊かだったかを証明している。2007/平成19年度に改修を行い、建物の保存と共に最上川舟運や青芋、漆、蚕、林産物など山の恵みで生きてきた山村の生活産業と食文化を伝承・体験するために整備を行った。

資料館のサポート団体「<sup>あおそふかつゆめみだい</sup>青芋復活夢見隊」が、江戸時代以降、換金作物として当地の経済を支えた青芋を活用したいろいろの取り組みを実践し、中でも「<sup>あおそごぜん</sup>青芋御膳」として伝統食と共に提供し大好評を博している。

## ★<sup>どめき</sup>百目木

"どめき"はなにから来たのだろうか。江戸期の絵図面には「ドウメキ」という表記も見える。山形市にも「百目鬼」と書いて"どめき"という地名がある。小漆川にも"ドンドンメキ"という呼び名のところがあり、あるいは滝のように水が大きな音を出す場所をそのように呼び、後から漢字をあてはめるときにこの字を付けたのではないかとはいわれ、全国的にこのような場所にどめき(百目木等)の名称が多くある。

ここには2連の大きな座敷と1つの小さな座敷の"やな"(兼子さん)があり併せて川魚料理の料亭も出していた。隣接して百目木茶屋(阿部さん)があり昭和30年代(1955~65)頃まで営業をしていた。「百目木茶屋唄」発祥の茶屋である。最上川では芸者衆を乗せボート遊びをしたり、料亭では屋形船を仕立て食事や酒を飲ませる等でにぎわい、特に市の日は大層な賑わいを見せたという。当時のボート遊びなどの絵葉書が残っている。

大江フットパス(百目木~藤田大明神)約3kmの起点である。

## ★<sup>なみきり</sup>波切不動尊「大瀧山不動尊」

楯山城(日本一公園)の麓に鎮座する不動尊を「波切不動尊」と親しみを込めて呼んでいる。正式の名称は「大瀧山不動尊」という。それをどうして"波切不動"と呼ぶようになったのか。それには最上川舟運が深くかかわっている。

今はJR左沢線で遮られ、不動尊と最上川が遠く感じられるが、鉄道の盛土工事の時その敷地から多くの流木が掘り出されたといわれ、最上川が大洪水の時などはすぐ近くまで流れが来たことを物語っている。

米沢まで舟道が出来、最上川舟運が盛んになった元禄の頃より大正時代まで、船主や船頭衆及びその縁の者たちは航行の安全を祈願して最上川を上り下りするようになった事から、いつしか"波切不動"と呼ばれるようになった。

不動尊の祭礼は地域を挙げて盛大に行われた。最上川からは境内まで見渡せ、大きな上り旗や参道にはご神灯と書かれた田楽灯籠が立ち並び、所狭しと出店や見世物がかけられ、ひしめき合ったといわれる。若い衆による楽しい演芸、郭の女衆による競い合う歌舞など、たいそう賑わったといわれる。

不動尊は水が涸れることの無い神聖な滝のところに祀られる例が多く、ここも水量は少ないものの涸れることの無い湧き水が滝となって流れ落ちている。山城時代には重要な水源であったものと推察出来る。この不動尊の別当は天台宗光明院であり古くから山城とのかかわりがあったと思われる。

## ★大江の文化財

### 「国指定文化財」

《左沢楯山城》	所在：大江町大字左沢字楯山地内 面積：約25ヘクタール	2009/平成21.2.12(平成22.2.22追加)
《重要文化的景観》	所在：大江町東部地域 面積：255.9ヘクタール	2013/平成25.3.27指定

### 「日本土木学会」

《旧最上橋》	推奨近代土木遺産	2003/平成15
--------	----------	-----------

### 「県指定文化財」

《神代カヤ》	天然記念物	所在：大江町小鉾	1952/昭和27.4.1指定
《松保の大杉》	天然記念物	//：大江町小清字松保	1953/昭和28.8.31指定
《阿弥陀如来座像》	彫刻（平安時代の作）	//：大江町大字三郷丙(伏態)	2010/平成22.4.30指定

### 「町指定文化財」

《板碑 2基》	史跡	所在：大江町大字貫見史跡	1978/昭和53.1.17指定
《大江町立歴史民俗資料館》	建造物	//：大江町大字本郷丁	1979/昭和54.8.30指定
《御戸 帳 雷神社(中の畑)》 <small>おとちよう</small>	工芸品	//：歴史民俗資料館	1985/昭和60.3.23指定
《左沢藩主酒井直次の墓》	史跡	//：巨海院	1989/平成元.3.8指定
《 同 夫人の墓》	史跡	//： //	//
《巨海院山門》	建造物	//： //	//
《矢引沢の大杉》	天然記念物	//：大江町大字柳川	1991/平成3.9.20指定

### 「巨木」

県指定天然記念物	《松保の大杉》 <small>まつほ</small>	樹齢おおそ1500年 根周り15m、高さ26m	生誕は聖徳太子や仏教伝来の頃か
同	《神代榿》 <small>じんだいかや</small>	樹齢おおそ1500年 根周り9m、高さ19m	
町指定天然記念物	《矢引沢の大杉》	樹齢おおそ1000年 根周り11m、高さ28m、幹周り6.5m	生誕は前九年の役の頃か
町指定保存木	《柳川の榿》 <small>けやき</small>	所在：大江町大字柳川(青柳橋たもと)	
同	《八幡神社トチ》	所在：大江町左沢	
同	《エドヒガンサクラ》	所在：大江町大字堂屋敷白山神社境内	
同	《シダレサクラ》	所在：大江町大字本郷甲(葛沢)	
同	《イチョウ・杉》	所在大江町大字橋上赤祇春日神社	

## ★最上川大明神川原・おしん<sup>いかだ</sup>筏口ケ地

大明神とは対岸の高台に稲荷大明神が鎮座していることからこの地一帯を「大明神」と呼んでいる。神社は中郷<sup>なかごう</sup>地内であるが、舟運の盛んなころは航行の安全を祈願した神社であったと思われる。

1983/昭和58年、NHKテレビ小説「おしん」の筏で奉公に出るシーンがこの地でロケされた。世界で感動を呼び73カ国・地域で放映されている。大江町では他に最上橋での回想のシーンが撮られた。1月19日の厳寒の時期に原作者の橋田壽賀子さん、おしん役の乙羽信子、田中裕子、小林綾子、母役の泉ピン子などが揃い踏みし、町の職員の多くが協力し、筏の製作は中沢口<sup>なかさわぐち</sup>の庄司林業の努力によってあの感動の別れのシーンが撮影された。

県内では中山町岩谷での生家シーン、朝日町杉山では吊り橋での回想シーン、西川町大井沢では寒中母親が川に入り墮胎するシーンや脱走兵と炭焼小屋で過ごすシーン、尾花沢市銀山では母親の働き場所に訪ねるシーン、そして酒田では奉公などのシーンが撮影された。

ロケでの裏話も様々である。中でも、

- ・別れのシーンのとき、父親役の伊東四郎さんが都合で来れなく2日後に別にロケを行い、放送ではいかにも父親が同時に居たかのように作り上げていること。筏が流れ行くシーンでは、本当に流れてしまうと困るので、命綱のロープを筏に結び、それを河原で5～6人で持ち、少しずつ離しながら流れ行くシーンを撮ったのですが、ロープを持つ人が画面に写ってしまっはまずいので、どうしたか?。ロープを持つ人に白いシートが渡され、雪の白と紛れて人が見えないように被って最後の筏口ケを終えたこと。
- ・小林綾子さんが前日に熱を出し、地元の白田医院長が付ききりでロケを終えたこと。
- ・筏口ケの前の晩に左沢温泉で乙羽信子さん、田中裕子さん、小林綾子さん及びNHKのスタッフと長瀬町長はじめ協力した町職員と会食しながら懇談をしたことなどがある。

## ★釣りキチ三平とヤマガタダイカイギュウ

2007/平成19年8月に発刊した週刊少年マガジンの増刊として釣りキチ三平に「御座<sup>ござ</sup>の石」としてアユの餌となる新鮮な水苔が豊富に付き良質のアユが生育する川があり、三平がそこでカイギュウの化石を発見し発掘するまでの180ページを越えるストーリーの大作である。

この題材は、大江町の用地区の最上川で、1978/昭和53年8月左沢小学校6年生の渡辺政紀くん、斎藤正弘くんの2人の生徒により発見され、アメリカの大学教授でありカイギュウの権威であったドムニング博士によって古いカイギュウの化石であることを確認。左沢の白田石材をはじめ多くの人々の協力により発掘し、ヤマガタダイカイギュウと命名するまでの事実をマンガ化したものである。

釣りキチ三平が「御座の石」という最高のアユが育つ条件の場所でダイカイギュウの化石を発見したストーリーで、魚に関しては絶対の自信でマンガを書かれる矢口高雄さんが大江町に足を運んで書かれた。世界の国々を取材し作品を作られている作者です。

この作品によって国内はもとより世界に誇れる物語りとなった。

ダイカイギュウのレプリカは、現在はふれあい会館ホールに展示している。



## ★大江の農産物

大江町は一日の気温差が大きい等、農作物がおいしく育つ好条件にあり、これに加えて農業者の高度な生産技術とあいまってさらに高品質の農産物が生産されている。

春の山菜、初夏のさくらんぼ、夏野菜、デラウェア等のブドウ、桃、<sup>わせばんせい</sup>早生晩生のリンゴ、ラ・フランスを代表とする西洋なしなど多くの農産物が毎日の食卓を彩り、関東など消費地での評価がすこぶる高い。

果実生産の順はリンゴ、西洋なし、もも、すもも、さくらんぼ、ブドウ・・・である。

米では、食用米のつや姫、雪若丸、はえぬき等は月布川等の清流で、安全でおいしい米が生産され、酒米は<sup>でわ</sup>出羽燦々、<sup>さんさん</sup>出羽の里、<sup>みやまにしき</sup>雪若丸、深山錦等県内最高の品質を誇っている。

高品質の農産物が生産できる条件に恵まれた大江町であるが、生産農家の高齢化が進み離農者が後を絶たない。このため、新たに農業に就業希望する方々に積極的に働きかけを行い、これまで多くの新規就農者を受け入れてきた。受け入れ団体「OSINの会」が中心になり営農技術等の伝達をはじめ地域集落活動への参画など地域民との関わり方を含めた活動を活発に続けている。

大江町はこれらの活動を物心両面で支える他、新規就農者のための住宅を建設し、安心して暮らせる条件整備と各般のバックアップに努めている。

## ★<sup>あおそ</sup>青苧「別称：苧麻(ちょま)、真苧(まお)、青糸綿苧(まがいそ)」

青苧の栽培歴史は長い。大江町では古代から栽培され税金(庸・調)として麻布に加工され物納されていた。中世の頃には青苧を換金産物として売り出されていたらしい。

1千年以上もの前から栽培されたことになる。<sup>しちけんそ</sup>七軒苧と呼ばれる大江町産の青苧は上品質で高級な<sup>なうさらし</sup>奈良晒に加工されたほか大阪、京都でも<sup>じょうふ</sup>上布に加工され、さらに、越後上布や<sup>おぢやちぢみ</sup>小千谷縮の原料となった。奈良晒に加工されたことが1748年の「奈良瀑布古今俚諺集」に記録されている。奈良晒や越後上布そして小千谷縮は朝廷等への贈り物となり、宮中の高貴な方々の衣類として重宝がられた他、伊勢神宮のさまざまな衣類や帷子として貴重がられたようである。大江町産の青苧が日本最高の衣料の原料に使用されたのである。

生産量の明確な資料はないが、左沢藩領内では1631年に約60トンの販売量があったことが記録されている。これには幕府領の七軒地域は入っていないと考えられ、また、大江町以外の朝日・西川地域の青苧が入っていたと考えられる。明治34年の七軒村の記録によると約28トンの生産記録があり、最盛期の江戸時代の生産量は計り知れない量があったと推測される。

時代の変遷で衣料に使われる材料が大きな変化があり、青苧の生産は、蚕生産の桑畑へと激変し、蚕もまた化学繊維に主役を取られ、青苧の一大産地は原生林へと先祖帰りとなってしまった。

大江町の特産品だった青苧の当時の産業経済を支えた史実を後世に伝え、改めて大江町の特産品に活用したいと<sup>あおそふかつゆめみだい</sup>「青苧復活夢見隊」が組織され、繊維としての活用は元より、栄養価が高く健康食として地域の伝統食と併せ提供し大好評を呼んでいる。

ちなみに伏態や河北町岩木観音、仙台市の県民の森にある青苧神社の御利益の一つが脳卒中と云われる。また青苧の繊維が丈夫でなかなか破れないことから脳の血管が切れないようにとの意が込められているようだが、青苧の成分検査で、血液サラサラ成分のポリフェノール等を多く含む事が判明し、食用としての効用が証明されている。

## ★大江の特産品

農産物は大江の特産品の大きな位置を占めるが、農産物以外の特産品として大江町商工会が中心となり「おおえブランド」として選定した。

令和元年現在29品目を数える。

その内容は「おおえブランド、おおえプライドいいもの発見大江町」のパンフレットで紹介している。

## ★大江の地酒「大江錦」<sup>おおえにしき</sup>

昭和の初めには大江町の区域に5つの酒蔵があった。太平洋戦争の最中、厳しい米の統制と酒造業者の企業整備によって全ての酒蔵が1941～44/昭和16～19年にかけて酒造を廃止し、以後大江町の区域には地酒が皆無となってしまった。

1987/昭和62年に至り、2年後に大江町制30周年を控え、何か記念となるものはないかとの模索の中で発案された中の1つが「大江の地酒」造りであった。

地酒である以上「大江町の米と水、そして大江町内の酒蔵で造らなければならない。」が原則となるが、酒米と水はメドはついても酒蔵が難問であった。結果として大江町内で見つけることができず委託醸造でも止むを得ないとして寒河江の千代壽虎屋酒造に委託することに決定した。酒米づくりも容易で無かったが、一般の食用米とは違う栽培の苦労を克服して今では県内最高水準の酒米を生産する県のリーダーに成長している。酒水は柳川の奥山の湧水を取水している西部簡易水道水を使用している。

こうして造られた60数年振りの大江の地酒にネーミングが必要となるため、広く公募を行い、応募された中から最終審査で「大江錦」と命名された。

大江町制30周年を迎えた1989/昭和64年(平成元年)の町民新年会において、地酒「大江錦」が披露され、併せて試飲会が催された。発売は、量が限られていることから、この年は3月から年4回のみの限定販売となった。

以後、次々に「大江錦」のレパートリーが広がり、大吟醸「神通の雫」純米酒、焼酎「舟唄の里」等の他、徳利杯等のグッズ、のぼり旗なども発売された。

大江錦誕生30年を経た2018/平成30年、「大江錦」づくりの経過を残すため「大江の地酒づくり物語」を刊行した。

大江町制60周年記念の2019/令和元年、新たな酒米「雪女神」を使用した「大吟醸大江錦」が発売され、さらにレパートリーが広がっている。

## ★最上川舟唄

最上川229kmの流れの中に約200kmもの区間(酒田～糠の目)に、舟の往来道が出来たのが1600年代後半の江戸時代元禄の頃である。それまでの最上川には部分的に古代から舟の往来はあったもののこれほど長い舟道は無かった。最上川の急流や難所が点在する川を往来するにはそれに適した舟と腕のよい船頭が絶対条件であり、各地の川の船頭衆が招かれた。同時に、それら船頭衆は各地の掛け声や唄、物語等を最上川の河岸にもたらしした。

昭和の初め、日本放送協会(NHK)仙台放送局から左沢の渡辺国俊氏に「最上川に舟唄が無いのか!」との問い合わせに、無いとは云いたくなかった渡辺氏は自分で作り最上川舟唄として提出したがものにならなかった。再び最上川舟唄の要請がきたときは、さすがに自分だけの手には負えないと考え民謡の歌い手である後藤岩太郎氏に依頼してきた。ここからは後藤氏の苦労と努力が始まり、最上川の船頭経験者や舟着場の多くの人々を尋ね、また、自ら舟に乗り最上川を何度も上り下りして構想を練り、ヴォルガの舟唄を頭に浮かべながら後藤作太郎、後藤与三郎の両氏とともにようやく作り上げ、渡辺氏とさらに2・3番の歌詞を加え完成の域に至ったのが1939/昭和14年の頃である。

大きな転機となったのが1941/昭和16年5月に山形県内に訪れた日本放送協会仙台放送局主催の東北民謡視聴団である。柳田国男ら日本一流の文化人の前で披露した最上川舟唄は大絶賛を得、日本の舟唄として認知された瞬間であった。

1946/昭和21年10月には読売新聞社主催の東日本郷土民謡コンクールにおいて第1位の栄冠を得て、全国へと広まり一大ブームを起こした。

最上川舟唄の名声は、その後日本民謡協会の年次大会、毎日新聞全国民謡大会、大分県での全国民謡民芸大会、北海道江差かもめ島道立公園指定まつり、日本ドナウ交流年山形フレンドシップコンサート、宮城県亘理町との民謡交流、全国豊かな海づくり大会ゲスト出演などの出演が相次いだ。

民謡のブームは落ち着き、大江町の文化として発信するに苦労の多い時代となっているが、全国、世界に誇れる大江町の数少ない文化であることには変わり無く、町を上げて「最上川舟唄全国大会」を初め各種の催しや各種の音楽ジャンルを通し、普及とPRに努めているが、さらに力を注いで行かなければならない。

## ★おもしろい地名

### 《左沢》あてらざわ

説は多くありどれが本当か分からない。「左の事を"あて"と云った」「日陰地や荒れ地を"あて"と云った」「"あちら"を"あてら"と読み替えた」「アイヌ語の<sup>ア</sup>(支流の)テイラ(森林のある低地)から付けられた」などである。左を「あてら」と読むのは極めて珍しく、松島付近に"左坂"と書いて「あてらざか」と云う程度らしい。また、別の説では大江と朝日の境に日光山があり、そこに殿様(大江親広の事か?)が登り太陽の上る方向を向き、左の方向にある集落の名を問うと「"あてらざわ"である。」と答えたが、「どのような字だ。」とさらに問うが「字はありません」と答えたので「それでは、左の沢にある集落だから"左沢"としよう。」としたと云う。さらに「右の方の集落は何という」と問うと「"かてらざわ"である」と云う。「字は何か。」と聞かれたが、「字はありません。」と答えたので「それでは右の沢の集落だから"右沢"としよう。」と云うことで以後この字が地名になった。今も朝日町大谷の小字名に"右沢"と書いて「かてらざわ」と呼ぶ地名がある。

### 《百目木》どめき

水の流れが急で音を立てて流れ落ちる地形による。山形市にもこの呼び名の地名がある。字は"百目鬼"と書くが意味は同じである。全国的にこの名の地名は多い。

### 《伏熊》ふしくま

全国に1つだけの地名と云われる。寒河江市<sup>ひらしお</sup>平塩の熊野神社との関係が深く、祭りの際は伏熊から<sup>ちごまい</sup>稚児舞の稚児を出す決まりになっていた。今も伏熊から平塩に至る山道を稚児道と呼ぶ。名前の由来は不明であるが熊の名から熊野神社との関わりが伺われる。

この地には、鎌倉初期に大江親広が富沢に隠れ住んだを守るため、家臣の中山氏が伏熊の楯に住んだ。目立たないようにのぼり旗などを一切立てなかったと云われ、今も鯉のぼりをたてる習慣がない。また、平安時代の作と云われる阿弥陀如来座像があり県内最大の大きさを誇る。この座像は大江氏家臣の中山氏が持ってきたものなのかは不明である。

### 《用》よう

近くの明神ハゲの地形を、古語のヨウル=崩壊地形を表すことから"用"の字を宛てたと云う説と、律令時代税の租・庸・調の庸が用になったという説がある。

当地を含む近隣地域は、古来から<sup>あおそ</sup>青芋の生産がなされ税として現物を収めていたといわれ、あるいはそうかもしれない。

### 《富沢》とみざわ

大江親広が隠れ住んだ富沢の楯は集落の西側にある裏山である。最上川の河岸段丘で砂礫層を含み、大沢は侵食により削られた段丘の地形になっており、崩れ地の"とび"が"とみ"沢となり、佳い字の富沢が宛てられたと云われる。

## 《小見》 おおみ

古くは麻積(おみ)、苧績(おおみ)と書かれ麻で糸づくりを専門とする人々のいる村を指した。当地はかつて「麻積」とも書き麻糸づくりの職人集落であり、取引の多い越後との関わりがあったと云われる。後に読み書きに容易な小見に改められたらしい。

## 《荻野》 おぎの

荻というイネ科の植物で湿地に群生する。矢の材料や屋根、雪囲いの材料に利用された。<sup>うるしかわ</sup>漆川(月布川)が蛇行しており湿地が多く萩の生育が旺盛なこの地の名称になった。中世には荻の袋という大江一族の楯があった。1368年<sup>しば</sup>斯波氏(最上氏の祖)と戦った漆川の戦いがあり大江一族63名がこの地で自害した。

## 《堂屋敷》 どうやしき

15世紀の初め大井沢大日寺の住職となった道智上人がこの地に草庵をつくり活動の拠点としたことに由来する。荻野の長泉寺の開基は道智上人と云われ、自ら彫ったという地藏菩薩像が本尊となっている。

## 《顔好》 かおよし

全国に一つだけの地名と云われる。江戸時代には顔吉、好吉と書いて「こうよし」と呼んだ。顔の付く地名は全国で10箇所と云う。地名の由来はこの地を領した大江広顕は源好吉とも称したので、あるいはこの名に由来するのかもしれない。大字顔好の区域は結構大きく、顔好、久保、三合田、原まで及ぶ。地区内には真赤沢という地名がある。その昔、源義家と安倍貞任との戦いで川の水が真っ赤になるほど血が流れたとの口伝がある。また、安倍森、安倍壇と呼ぶ小山がある。

## 《十八才》 じゅうはっさい

全国的に珍しい地名。2～3の地名説がある。その一つに集落は、小倉交流館の西側の高台に寺屋敷と呼ばれている周辺の所にあったと云われる。そこには、坂を上らなければならないことから「坂上がりの部落」と呼ばれ、いつの間にか詰まって「さかり部落」と呼ばれるようになり、人々は「さかり付いた部落」と良い意味にとって貰えない。「別によい名は無いのか?」と云うことで「人間一番盛りなのはいつのころ?」それは「十八才のころだべ。」と云うことから「十八才」と命名したとの口伝がある。今も集落入口には深い沢があり、埋め立てしてゆるやかになっているものの歩く時代は谷を降り谷から上って集落に入らなければならなかった。同じような地名は四国の徳島県に「十八女」という地名がある。呼び名は「さかり」と云う。当方では「さかり」とは"恥ずかしい"と考えたが、徳島では堂々と"さかり"と読ませている。

## 《月布》 つきぬの

律令時代の奈良・平安の頃、租庸調の税制の中で青芋の産地であった当地域は布に織って納めていた集落であったのではないだろうか。かつて「調布」と書いて"つきぬの"と呼んでいたと云われる。書くにも読むにも難しかったことから「月布」に変えたと云われる。

## 《貫見》ぬくみ

月布川は蛇行の激しい川である。そのため各地で大水の際は水害で悩まされてきた記録がある。上流の貫見では月布との境にある"へめぐり"が特に蛇行が激しく水が抜けにくく水害の常習地となってきた。「なんとか水をスムーズに抜く方法はないものか。」住民の切なる願いが、抜く→貫く、水見という字をあてて「貫見(ぬくみ)」と名付けたと云われる。住民のその願いは"へめぐり"の蛇行をショートカットする案で具体化し、1737/元文2年、柴橋代官所に願い出たがなかなか許可が降りず、実現したのはなんと118年後の1855/安政2年)の事であった。

## 《矢引沢》やびきざわ

<sup>みなもとのよりよし</sup>源 頼義、<sup>よしいえ</sup>義家親子と<sup>あべさだとう</sup>安倍貞任が戦った<sup>ぜんくねん</sup>前九年の役の時、義家が山の神のあるこの地に布陣し、戦勝祈願のため弓で<sup>かぶらや</sup>鏑矢を引いたとの口伝がある。その矢は3kmも離れた<sup>そやがた</sup>西川町征矢形まで飛んだという。この地名の由来の一つである。また、尖った山の麓の小さな谷地で地滑りの地形を矢引と呼ばれるという。小字は<sup>どうち</sup>道智屋敷であるところから道智上人にちなむ土地である。大杉があり樹齢千年と云われる。

## 《切留》きりどめ

道智上人が道智畑に住み、北の方から開拓を始めてこの地で終えた事から"切り留め"の地と呼ばれ、これが地名の由来となった。寺があったらしく寺屋敷、鐘衝堂、春海壇等の地名がある。

## 《道知畑》どうちはた

今は地名だけとなった。大井沢大日寺の住職となった道智上人は福島、新潟、関東から湯殿山信仰を広める布教活動を行い、併せて道智道と呼ぶ行者道をいくつも開削した。その拠点の一つとしたのがこの地であり、地名の由来となった。道智屋敷、道智池、道智の腰掛け石、道智滝などの地名がある。道智畑から"下峠"を越え大日寺に至る道智道の一つがある。

## 《古寺》こでら

奈良、平安、鎌倉初期には山岳信仰が盛んで、朝日岳も修験の山であったと云われ古寺には「南光院」という寺があったという。北条が政権を握った時代山岳信仰を厳しく弾圧し、朝日岳は千年封じにあったと云われる。以後専ら三山信仰が盛んとなり湯殿山参りが道智上人によって盛んになった。古寺には新たに「千眼寺」が置かれ、そのとき昔この地に寺があったことにちなみ"古寺"と呼ぶようになったと云われる。

道智上人は置賜の鮎貝～木川～古寺～大井沢「大日寺」ルートの道智道の一つを開いた。1300年後半頃のことと云われる。

## ★追補《ある質問に答えて》

### 地名など

#### Q.集落名や地名の由来

A. 集落名や地名は、地形や位置、植物、歴史や宗教、アイヌ語などに由来するなど様々ようです。詳しくは「地名を探る」小関昌一著(大江町誕生40周年記念)を参考にすると良いでしょう。図書館にあります。その本を見て多くの地名の由来や歴史を知ってください。

- ◆地形や位置 左沢(アイヌ語のと説もある)、市の沢、深沢、滝の沢、北山、貫見、塩の平、沢口など
- ◆植物 梨木原、葛沢、檜山、材木、柳川など
- ◆歴史や宗教 堂屋敷、諏訪原、望(坊)山、所部、月布、弁財天、古寺、伏熊、小見など
- ◆珍しい地名 顔好、三合田、十八才、ガバ、道海、化猫場、百目木など

#### Q.最上川の事についていろいろ知りたい。

##### A. ①名称の由来

説は多数あるが古今和歌集(905年)の中に「最上川上れば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」とあり、この頃はすでに最上川と呼ばれていた。さらにさかのぼる712年に出羽の国が成立した時には、内陸地域を最上郡と呼んでいた事から最上の方から流れて来る川「最上川」と呼ばれたと云う説。(左沢から上流は「松川」と呼ばれていたらしい。)また、別の説では、今は「最上映」と呼ばれている古口～清川の断崖絶壁を"モモ"と云われ、その上流つまり上<sup>かみ</sup>から流れてくる川であることからモモカミ川がモガミ川になり「最上川」となったと云う説などがあります。

##### ②最上橋

最上橋と名付けられた由来は分かりません。1883/明治16年に木橋が初めてかけられ、その時に「最上橋」と名付けられたようです。木橋はその当時のお金で1000円で完成したようです。(その内中郷が210円負担したことから中郷村民は無料だったと云われる)

旧最上橋は1940/昭和15年に架けられ、経費は8万円と云われます。長さは97.6mです。2003/平成15年に近代土木遺産となり国レベルの宝になっています。

最上橋は9年を要して2003/平成15年に完成しました。総工費26億円、長さ129.5m幅16.5mの立派な橋です。

##### ③最上川にかかる橋の数

最上川には80橋以上もの橋がありますが、なぜそんなに必要なのでしょう。

山形県を縦断する最上229kmには多く道路や鉄道が横断します。車社会が盛んになり、歩車道分離などより便利な交通に対応するには多くの橋を必要とします。高速道路やバイパス道路などにより新しく橋がかかっており、今後まだまだ増えそうです。

#### ④舟着場について

左沢舟着場の昔の様子を書いた絵図として「最上川絵図」として数点残されていますが、大石田舟着場の様に詳しく書かれた絵図は今のところ見つかりません。でも、左沢から上流部はこ う か い ぶ ね小鵜飼舟、下流部はひ ら た ぶ ね鰯舟と厳しく規制され、必ず積み替えなければならない年数が長かったことから、多くの人々が働き、賑わった川港であったものと推察できる。1827年/文政10年の左沢藩の人口は9,007人、2,049軒あり、この約16%の1,450人333軒が左沢地区に住み、舟運に何らかの関わりをもっていたものと思われます。他の地域から働きに来ていた人々を含めるとさらに多くの人々で賑わっていたものと思われます。

最上川200kmの舟運路には、舟着場は酒田を含めると19ヵ所程ありました。左沢の舟着場は米沢藩、松山藩、幕府領、商人などにそれぞれ対応する場所があり、百目木から約1km以上上流までの区間にあったと云われています。

舟は時代によって様々で、米沢藩有では1,791年に鰯舟だけで36艘を数えていました。松山藩、幕府、商人などの持ち舟の記録は不明です。1,795年に40、50俵積みの小鵜飼舟を建造したとの記録がありますが舟数は不明です。

#### ⑤源流

福島県との境界にあるひのほえ火焰の滝を源流と一般的に云っています。しかし、最上川に注ぐ全ての支川や沢の水が最上川を構成し大河となっているわけであり、その全てを源流と言えます。

総延長は229.008km(内沢国管理205.988km県管理18.50km米沢市管理4.52km)です。

県民手帳には、国・県管理部分の合計224.488kmが最上川流路延長と表示しています。

#### ⑥水害への対応

最上川河畔に住まわれる方々の大水への対応は気が休まることがないと思われます。しかし、最上川の美しい流れと毎日接して居られることや、灯籠流し花火大会などは自宅に居ながら楽しめるぜいたくさから、そこから去りがたいのかも知れません。昭和42年の羽越水害以降川岸に住む方々は床を高くした家造りを行うなどにより、洪水の被害を少なくする知恵を働かせて水害への対応をなされておられます。

#### ⑦百目木の名称の由来

最上川など川や堰の滝のような場所を「どうき岩」とか「どんどめき」とか音に由来した呼び名で呼ばれて居ました。ここに漢字の名称を付けるにあたり「百目木」などと名前を付けたようです。ちなみに「百目木」も山形市にある「百目鬼」も字が違っても同じ意味です。全国的に多くあるようです。



## ⑧舟運時代について

舟は左沢より上流部の小鵜飼舟(米にして30から50俵積み)、下流部の鰯舟(米にして300俵から450俵)の2種類あり、左沢の舟着場で積み替えるよう厳しく規制されていました。明治になると航行がし易い小鵜飼舟だけになったようです。

小鵜飼舟は通常3人で航行していました。航行は左沢から酒田まで川水の状態によって違いがありますが、4～5日を要しました。また、酒田から左沢に帰るときは4～5倍の15～20日を要したと云われ、荷物の積み降ろしの日数を加えると一往復約50日を要し、このため、舟乗り達は1年に3～4回しか航行出来なかったようです。特に、上り舟の時は1艘では急流を上せることは出来ないため数艘の船団を組んで上った様です。

航行している間は誰も食事を作ってくれないので自分たちが舟の中で調理しなければならなかった訳です。ですから、最上川舟唄にあるように「股大根の塩汁煮、塩しょぼくて食らわんにゃえ。」と味噌等の入れ具合が悪いと愚痴を云わなければならない食事だったと想像されます。

酒田に向かう舟荷は、米、青芋、紅花、漆、ロウ、雑穀など。酒田からの帰り舟には、ニシン、昆布、タラ、カスベ、反物、古着などの生活用品やお雛さま、上方の珍しい品物など豊富だったようです。また、舟の重しとなる石灯籠や庭石、赤瓦などもあったようです。

## 歴史等について

### Q.大江町を造った代々の殿様などについて

- A. 歴史上名前がわかるのは、大江氏、最上氏、酒井氏です。大江氏は約396年間、最上氏は約39年間、酒井氏は248年間を治めました。この間、領主間の戦いや幕府の意向などによって領地の拡大縮小などの変化があったようです。例えば大江氏の始まりは平安時代の終わりに鎌倉時代の始まりの時期で、寒河江荘という寒河江西村山地方のほとんどもに加え、中山山辺町あたりまでと、長井荘と云われる置賜地方のほとんどもを治めていました。寒河江西村山一帯の最後の殿様の大江高基は、山形の最上義光氏に攻められ、貫見の御館山で自害し大江氏は終焉しました。光学院は1558年高基が大江家菩提のためとして建立したと云われるが、高基自身の菩提寺となり現在に至っています。たおした最上氏は、置賜を除く現在の山形県の中北部を支配し、楯山左沢城も支城となりこの地域の拠点となりました。江戸時代になると最上氏は改易され1万石の小さな大名として近江(滋賀県)に移され、その後に山形藩、庄内藩、左沢藩など多くの藩が造られ、藩主に徳川家に近い大名が入りました。庄内藩には家康の親戚の酒井忠勝が入り、左沢藩には忠勝の弟の酒井直次が入り、七軒・三郷を除く大江町域と寒河江西川朝日・白鷹の一部を含めた1万2千石の領地を治めました。家臣の数は不明ですが、江戸時代の1649年になると領地の大きさ(石数)により兵隊を出さなければならないとされる軍役令を幕府が出しました。それによると1万石で235人と定められており、左沢藩時代の家臣の数をこれから推察すると300人以上はいたのではないかと思います。交流ステーションに展示している"奴"は左沢藩の時には参勤交代が確立していない時期であったので、奴としての家臣がいたかどうかは不明です。1632年以降は庄内松山藩の支藩となり松山本城に代わって領地を治めるための出先の役所の役割を持つ代官所が置かれました。代官所の規模は現在のふれあい会館の建物付近の約7000平方メートルと推察されますが、家臣の住宅地や米等の倉庫蔵など別に造られていましたので結構な規模でなかったかと思われます。家臣の数は100人前後の少人数であったといわれます。

## Q. 大江氏や酒井氏の子孫は今も居るのか。

- A. 直系の方は居ないようですが、大江氏と同じ家紋、酒井氏と同じ家紋を持っている方は多く居り、先祖はその一族であったり、家臣で家紋の使用を許された関係でなかったかなどと考えられます。

なお、大江氏の広元と云う人は源頼朝の重臣で鎌倉幕府政所の長官でした。日本を時代時代に動かして来た毛利氏の先祖は大江広元の四男の<sup>すえみつ</sup>季光と云う人でした。

また、左沢藩主の酒井直次の祖父である忠次の奥さんは、徳川家康の伯母にあたる碓井姫と云う人であることから酒井氏は徳川氏と近い親戚になり、譜代大名の家筋です。

## Q. 山城の楯山城と平城の小漆川城について。

- A. 山城の楯山城は常に居住する居館の部分を含めると70ヘクタール以上はあったようです。平城の小漆川城は15ヘクタール以上はあったものと思われます。

楯山城は、天皇が2人存在し日本の国が真っ二つに分かれた南北朝時代に南朝方だった大江氏が1350年ころから数十年をかけて築城しました。標高は約220mで百目木の最上川の標高が約100mであり比高は約120mです。大江氏が最上氏に滅ぼされたあとも最上氏はこの楯山城を1622年まで使用したといわれます。

小漆川城は、江戸時代の1622年に左沢藩の藩主になった酒井直次が、鉄砲や大砲の時代になり山の高い不便な所に城を置く意味がなくなったことから、小漆川に築城し、併せて城下町を整備しました。どのくらいで城や城下町が完成したかは不明ですが、直次が藩主になって約10年で亡くなっていることからそれまでにほぼ完成されたのではないかと思います。城の建物は天守閣のない建物であったといわれます。

この時代はまだ戦いの不安が無くなったとは言えず、武器としての城が簡単に攻められない工夫がなされました。その一つが道の形です。実相院や小漆川の所にカギなりの道が今も残っています。

現在の町割りの原型はこの酒井直次の時に造られましたが、若くして直次が亡くなり子供がいなかったことから約10年で左沢藩は消滅してしまいました。城は間もなく取り壊されましたが、1630年代に大手門は直次の菩提寺の巨海院の山門として移築され、今も当時の名残をとどめています。山門の左右には邪気を払う阿吽<sup>あうん</sup>の仁王がにらみを利かせています。

## Q. 楯山城の発掘はどのくらい進んでいるのか。

- A. 1996/平成8年から開始して31年を経過しています。これまでの発掘調査により柱穴を始め構造物の跡、武器、陶器等の出土など、楯山全体が敵に備える機能を備えた広大な山城であったことがわかっており、2009/平成21年に国指定史跡になりました。

城は武器の一つです。そのため攻めにくく守り易い様に造られており、上りにくいように急勾配の崖に囲まれ、敵が攻め易い道など無く、建物などが建つ平たい処は柵で囲み、見張り台を要所に建て、城内で弓矢などの武器を造れるよう矢竹を植栽したりと工夫をこらしていたようです。

現在の楯山城址は森になっていますが、その時代は、敵に有利になるような樹木を植えることはありませんでした。もし、現在のように森になっていて、敵に攻められ、麓から火を付けられると城は燃えてしまい武器としての城の意味が無くなるからです。

この楯山城で敵と戦ったとの言い伝えはありません。戦いがあり焼かれたとすれば発掘したとき柱穴には燃え残りの柱が有るはずなのに、どこを発掘してもそういうものはなく、柱らしきものも出てこないといえます。言い伝えによると新たに小湊川に城を築き城下町を整備するときに、楯山城にある多くの建物の材料を使用して新たな城下町づくりをしたためといわれています。

Q.大江町には城はいくつほどあるのか。

A. 時代によって異なりますが、大江氏時代は戦国の世が続いた時代でもあり、狼煙台の楯を含めると約30ヶ所を数えるようです。最上氏時代まで左沢楯山城を使用したようですが、他の楯を使用したかは分かりません。左沢藩時代では、江戸幕府の一国一城令のため城を一つしか認めていませんでした。庄内松山藩時代では左沢は支藩ですので城は無く代官所の建物だけでした。

Q.町の歴史をもっと詳しく知りたい。

A. 大江町史はじめ多くの歴史の研究書があります。小学校の時にもらった歴史副読本から始めると良いと思います。聴いて知るのも良いですが、自分でちょっと苦労して調べると自分のものになると思います。楽しんでください。

Q.大江町に祀られている神社について。

A.

#### 《八幡神社》

源氏の氏神です。大江氏も源氏の家臣ですので八幡様を守り神としたようです。大江氏は武士であり戦いの武運を八幡様に祈りました。守り神を自分たちが住む場所より下に祭ることは失礼になるために高いところに祭っています。応神天皇を祭り、文武の神と云われる。

左沢の八幡様は最初楯山城を造ったときに寒河江の八幡様から分霊したと云われています。楯山城に「八幡平」「八幡座」と云われる所がその場所と思われます。その後、左沢藩が成立し、小漆川城と城下町が整備されると、城の鬼門に当たる現在の左沢駅の近くに移され、さらに1883/明治16年に現在地に移されました。

#### 《天神様》

学問の神として菅原道真を祭っています。平安時代は菅原家と大江家は学問の両家と云われ、管家・江家と呼ばれていたようです。このために両家は切磋琢磨したといわれます。菅原道真が身に覚えの無い罪を着せられ九州の太宰府に流され亡くなったことで京の都で異変が度重なり、これを鎮めるために朝廷は天満宮として菅原道真を祭ったと云われます。大江氏は学問の両家、両雄として天神様を篤く祭ってきたようです。

《熊野神社》 紀伊半島の熊野三社を分霊して祭っています。樹木の精霊を祭る

《稻荷神社》 稲の精霊を神にし祭っている神社。

《神明神社》 太陽神の女神を祭る。伊勢神宮が本社で大神宮、皇大神宮の名称もある。

《愛宕神社》 火の神、防火の神、鍛冶の神で、秋葉神社も同じ神と云われる。

#### 《不動明王》

悪魔退散などに信仰されている。大日如来の化身とされる。滝があるところに多く祭られている。楯山の麓にある大瀧山不動尊(不動明王)は舟運の時代、舟の航行の安全のため船乗り衆などが祈願してから上り下りしたと云われ信仰が篤かったという。

これらは町内各地に点在しています。この他に数え切れないほどの神様が祭られていますので皆さんの区内や家の周りを探して見ましょう。

## Q.大江町にある寺院について

A.

天台宗（最澄） 2 医王寺、光明院

真言宗（空海） 11 西林寺、安養院、永林寺、実相院、宝蔵寺、護真寺、善明院、  
清光院、西光寺、光養寺、妙法院

曹洞宗（道元） 6 巨海院、光学院、長伝寺、高松寺、大沢寺、善法寺

浄土宗（親鸞） 2 称念寺、法界寺、流泉寺

## Q. 寺院や神社はなぜ多くバラバラに配置しているのか

A. 寺院や神社は仏や神が居る神聖な場所であり、むやみに穢してはならないところとして神代の時代から信じられて来ました。このため、敵が攻めて来てもそこを避けることになることから、鬼門と称される大事な方位により多くの寺院や神様を配置したといわれます。

## Q. 伝統の祭り・行事の数は。

B. 集落の祭りや行事の数は数えられないほどです。町などが主催する祭りや行事を数えて見ると、二日町市、ひな祭り、ユリ祭り、舟唄全国大会、灯籠流し花火大会、神通峡まつり、うまいもの市、クラシックカーイベント、秋まつりなど15ほどを数えます。

各集落にはしょうぶたたき、田植え踊り地藏様あそびせ、正月行事など大事に集落の伝統として守り育てています。

おおえの「秋まつり」は毎年、左沢の八幡神社の祭礼の近くの日曜日を選んで実施しています。はやし屋台、神輿、シシ踊りの他、女相撲、ヒップホップダンスなど12団体前後の団体で町中を練り歩くなど賑やかに繰り広げられます。

昭和の初め頃までは天神様や八幡様のお祭りは二日も三日も続いたと云われます。

## Q. 大江町内の文化財の数は。

A. 文化財には多くの有形無形のものがあります。平成25年に国の重要文化的景観に選定された構成文化財だけでも、建物、歌句碑、唄踊り、城郭跡、寺院、最上川の景観等などがあり、さらに、これまで町が指定した樹木、仏像、山門など数多くあります。

ちなみに国指定が2カ所(史跡楯山城、重要文化的景観)、県指定が3カ所(松保の大杉、小鉾<sup>こじゅうな じんだいかや</sup>の神代権、伏熊阿弥陀座像)町指定が7カ所であるが、埋蔵文化財と云われる遺跡も55カ所ほど確認されています。また、国レベルの近代土木遺産として旧最上橋が認定を受けています。

原町の称念寺に「芭蕉の墓」がありました。驚いたことと思います。どうして墓としたかは不明です。1,774年(芭蕉が亡くなって80年後)に建立したものです。俳句の仲間である"左沢連"が俳聖芭蕉にあやかり上達を願って立てたものと思われます。ちなみに芭蕉は大阪で亡くなりましたが、菩提寺は近江(滋賀県)の栗津義仲寺にあります。巨木についてふれてみると、小鉾の神代力やは根周り9m・幹周り3.5m・株立ち5本樹高19m樹令約1500年。松保の大杉は根周り15m・樹高26m、樹令は約1300年～1500年。矢引沢の大杉は根周り11m幹周り6.5m樹高28m、樹令約1000年と云われる。その他に柳川の大ケヤキ、橋上春日様のイチヨウなどがある。いずれも神社の境内などで御神木として大事にされてきたため今日この様な巨木として見られると思います。もちろん誰が植えたかは記録になく、神代力やの植えられた頃は聖徳太子の頃と云うことになります。

## Q. 防空壕について

- A. ふれあい会館の場所は、庄内松山藩時代の代官所跡であり明治まで続きました。その後、明治6年寒河江西村山地方で一番最初に「第一番左沢学校」が創設され、左沢小学校として昭和61年まで使われました。

昭和16年太平洋戦争が開戦。日本本土への攻撃が激しくなった昭和18年頃からのアメリカ軍の空襲による児童生徒を守るため、町を挙げて防空壕の工事を開始。どのくらいの期間で完成したかは不明ですが、昼夜三交替で"数日"のうちに一期工事が完成したとあります。防空壕を掘るに適した岩盤が小学校の地下にあり、かつ掘り出した岩片をすぐ最上川に捨てることができ、早く工事を完成させることが出来たと思われます。

当時の生徒数は1200人程であり、二期工事も計画されていたといわれ、全ての生徒が入れる防空壕を考えていたと思われます。第一期工事として長さ60mの2本の坑道とその間を教室にするためくりぬき10区画の空間を造っています。入れるのはせいぜい500～600人と思われます。費用は当時のお金で15,000円と云われます。

当時の生徒だった方に当時の事を聞くと、空襲が何回もあり、そのつど防空壕に逃げ込んだ記憶があるが、防空壕の中で授業をしたとの記憶は無いと話しておりました。

昭和20年春に陸軍軍医学校が山形県の各地に疎開。中でも軍医団雑誌の印刷工場や衛生史編纂準備室が左沢に疎開し、防空壕と左沢小学校講堂はこのために使われ、わずか5ヵ月程で8月15日の終戦を迎えたとの記録があります。将来を担う児童生徒のために造られた防空壕が、軍の施設になってしまった事になり複雑な気持ちになります。

防空壕はこの左沢小学校地下だけでなく大江町の各地に掘られました。大規模なのはここだけで、ほとんどは10m前後の小規模のもので個人で掘られたようです。大瀧山不動明王の近くの洞窟も個人の防空壕だったと思われます。

大江町での空爆の記録はありません。大きな軍事施設が無く空爆の対象にならなかったものと思われます。

## Q. 斎藤茂吉について(1882/明治25～1953/昭和28)

- B. 上山市金瓶の森谷家に生まれました。医者として斎藤家に入り短歌が大好きでアララギの歌人として全国的に有名になりました。大江町では5首を残しましたが一つは高野山で歌ったものと云われます。大江町では全てを歌碑として石に刻み最上川河畔や町中に建立しています。茂吉は左沢に3回訪れた記録がありますが、いずれも1泊の滞在であったようです。大石田には疎開(1946/昭和21年1月～22年11月)しましたので多くの歌を残し第16歌集「白き山」を成しました。

称念寺には、茂吉の青山病院の書生をしていた前住職の山口さんの子息が戦死されたのを悼み、茂吉が電文で送った和歌を碑に刻み建立している。

茂吉の歌碑には茂吉の字と活字体のものがああります。茂吉が書いたものがあれば茂吉の書体、無ければ活字体で刻むよう指導されました。

Q. 大江町での大きな災害は

- A. 最上川の洪水の状況は現地で説明したとおりですが、これまで数え切れないほどの回数がありました。4年前も大江町全体が豪雨に見舞われ大災害を受けました。3年前も最上川が洪水に見舞われ、水嵩が上がり、ふれあい会館の防空壕の中にも浸水し大量の土砂が堆積しました。大正7～8年頃左沢線の百目木地内線路工事のとき最上川の洪水で流れて来た流木が大量に出てきたといわれます。昔はあんな奥までも水が上がったことがわかります。

また、左沢は密集地のため火災が頻繁にありました。大火災の一番新しい記録は昭和11年で132戸が焼失したとあります。江戸時代や明治時代も大火事の記録があり、一年で3回の大火があったとの記録もあります。

忘れてはならないのが1944/昭和19年12月にあった堂屋敷付近が震源地と云われる直下型の地震です。地割れや墓の倒壊、炭窯の崩落など大被害を受け、余震も数カ月<sup>おぎの</sup>に及んだとの記録があります。当時戦争中であり多くの人は空襲だと錯覚したとの事です。左沢地震、荻野地震などと呼ばれていますが、正確な震源地は、柳川神通<sup>しんつうきょう</sup>峡 付近と記録されています。

Q. 桃の実工房について。

- A. 捨てていた桃の種を活用して世界に一つと云われる工芸品を作り出した鴨田さんに称賛の拍手を贈りたいと思います。

当主の徳康さんで2代目ですが3代目も既に育っており、芸術品といわれるまでに磨きをかけています。桃の実の工芸品も既に20種類に達していると話しておりました。

もともと鴨田さんは稼業としては"こけし"を作っていましたが、初代の貞作さんが当時小見に町が誘致した日魯漁業の工場で桃の缶詰を作っており、その際不要の種を川に捨てていたものを拾い、乾燥させて茶筒などの工芸品を作って見たところ、すこぶる評判となり商品として売り出したのが始まりだそうです。ちょっとしたアイデアが見事な工芸品にそだてあげたわけです。吉村知事も時折訪れて買われて行くそうです。

Q. 大江町への観光客数は。日本一公園にはどのくらい。

- A. 年間大江町への入り込み客数は約75万人前後としています。その内訳は、初市、ひな祭り、ユリ祭り、舟唄全国大会、灯籠流し花火大会、秋まつりなどの他、様々なイベントへの参加者やテルメ柏陵、柳川温泉の入浴者、さらには朝日連峰古寺登山口の利用者も含まれています。もちろん日本一公園への来客数も含めていますが、正確な数は誰にも分からないというのが正直なところです。

日本一公園の入り込み客は、パンフレットを展望台に置いてありこれがほぼ1週間で100部程が持ち帰られていることから推察すると年間3,500人から4,000人程と思われます。

また、観光客数には大江町民も含まれているため、正確に町外客数を把握することは困難なのです。

Q. 大江町の用水路について

A. 米作りに欠くことが出来ないのが水です。このため町内の至るところに田圃に水をもってくる用水路が造られました。これには地域の農家や地主の人達の並々なめ努力と苦労、そして財力を必要としました。

中でも、北堰や南堰の大規模の用水路は何年もの期間と人夫と財力を要しました。北堰の歴史を見てみると、開始したのは江戸時代の中頃の1794年から15年を要し延長16kmであり、月布から市の沢までの大幹線用水路が完成し、灌漑面積約150ヘクタールもの水田を潤しました。

この用水路の開削を思い立ったのは時の大庄屋の鈴木多仲氏でした。しかし、多仲氏一人では完成することが出来ず、息子の佐太夫氏がこれを引き継ぎ親子二代で成し遂げた大事業だったのです。

この大事業は、当時土木機械などではなく全て人力であったわけで、とてつもない人数を要したわけで、人数を割り出すことは難しい。また、水路を何処を通すかの測量も大変な作業であったろうと推察されます。測量技術も未熟な時代であり、山の中腹に水路を通すのは並大抵の苦労ではなかったと思われます。

今でも、用水路の維持管理を十分にしないと水は流れなくなるので、管理する土地改良区の方々は昼夜を問わず管理と整備に努めています。大雨や大雪、草刈りや樹木の伐採など年間を通じて目を離せない仕事をしています。北堰は流域の防火用水など地域の生活用水としての機能がばかにならず、町全体で協力して管理運営に当たっているのです。